HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	道北地方におけるエゾヒグマ個体群についてII
Author(s)	青井, 俊樹
Citation	北海道大学演習林試験年報, 2, 46-47
Issue Date	1985-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72652
Type	departmental bulletin paper
File Information	1983_1-16.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

I—16　道北地方におけるエゾヒグマ個体群について　II

青　井　俊　樹

はじめに

前回の報告では、北大天塩地方演習林における長期間のヒグマの生態調査と、その周辺域での捕獲個体群の調査から道北地方、とりわけ周辺域におけるエゾヒグマの個体群の現況について若干の考察を試みた。その中で、演習林内における各種痕跡の著しい減少と、捕獲個体の弱齢化から道北周辺部におけるエゾヒグマの生息数の減少と、中央山系からの弱齢体の分数移動が推察されるにいたった。そこで今回は、その検証の意味も含めて調査を道北周辺部から中央山系付近までと、その範囲の拡大をめざして努力を開始したので、その結果について若干述べてみたい。

方　法

調査域は天塩地方演習林から日帰り調査回収が可能な範囲の半径およそ180km以内として、道北に関わる4支庁管内の5市21町3村、合計29市町村を対象とした。方法として各市町村の役場、猟友会支部部会及びおもだったハンター一人ひとりに直接面接し、調査の主旨説明と共に捕獲時の連絡と捕獲個体の頭骨、生殖器及び消化管内容物の提供を依頼した。このような準備を十分行ったのち、ハンターからの連絡を受け次第できるだけすみやかに回収におもむいて資料を借り受け、頭骨に関してはきれいにクリーニング(肉落し、洗浄)した後再び返却に行くという過程をくり返し行った。クリーニングを行った頭骨からは犬歯を抜歯して歯根部を切断した。切断した切片は保管しておき、6月中旬北大歯学部において常法により集中して年齢査定を行った。

結　果

従来の地域（遠別、名寄、枝幸を結ぶ線以北）を道北周辺部とし、今年新たに拡大した中央部を含めた範囲（留萌、幌加内、紋別を結ぶ線以北）を道北全域とすると(図)、春グマ猟では前者で11個体、後者も含めると38個体を回収、調査することができた。全捕獲数に対する回収率は88 4%となり総回収距離はおよそ8,000km前後におよんだ。

これらの資料の精査の結果、道北周辺部、中央部とも捕獲個体群の性比、平均年齢に有意な差はなく、また年齢構成においても昨年までの結果に見られた若雄突出型のパターンに大きな変化はみられなかった。

これは中央部での調査が開始されたばかりで、周辺部に比べて資料数が非常に少ないため中央部の傾向を正しく反映していないことが考えられる。また中央部では夏以降の捕獲割合が周辺部に比べて高いため今後これらの資料も含めてさらに長期的に調査を継続していく必要がある。

次いで生殖器に関して北大獣医学部において精査した所、雄では満2歳から性成熟に達した個体を、また雌では満4歳の個体において、卵巣から妊娠していたことを示唆する白体を、いずれも野生ヒグマでは初めて確認し成功した（坪田、未発表資料）ことから繁殖歴の追跡なども可能になり、今後の野生個体群の動態の調査に大きな手がかりを得ることができた。

一方天塩地方演習林においては、前回も報告したように近年の個体数及び痕跡数が急に減少してきたことから、地元猟友会と数次の話しあいを行った結果、1984年春から演習林の西半分（約1万5千ヘクタール）におけるクマ撃ち（追跡も含む）の自粛について合意に達した。ヒグマに関してこのような処置が、これだけの規模でとられたことは、諸外国では通常にみられても、我国では例がない。

今後、欧米では非常に研究のすすんでいる大型動物の保護管理という点について考え実践可能な場として、広大な面積を有する大学演習林の存在価値を高めていくことも必要かと思われる。

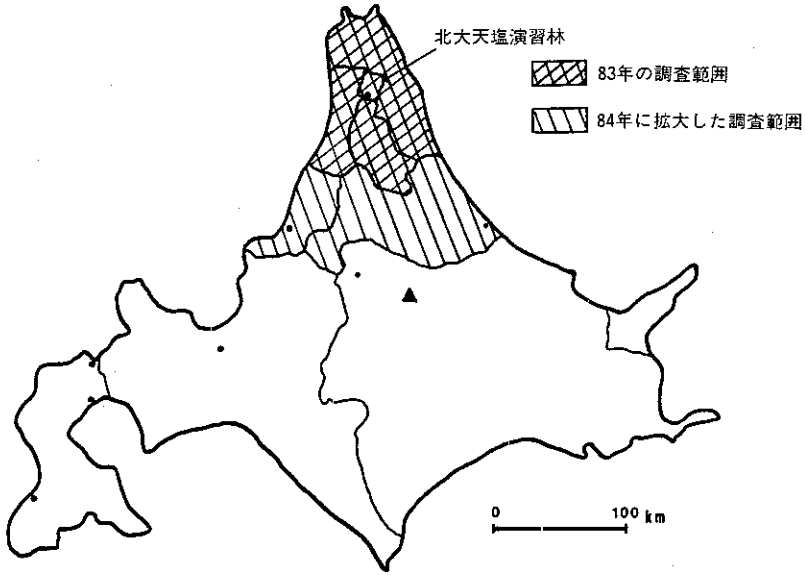

図　83年までの調査範囲と新たに拡大した調査範囲図